Osaka University Knowledge Archive

Title	企画者としての武満徹
Author(s)	小川, はるか
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44117
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【24】

氏　　名	小川　はるか（おがわ　はるか）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学位記番号	第　17466　号
学位授与年月日	平成15年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻
学位論文名	**企画者としての武満徹**
論文審査委員	（主査） 教　授　山口　修 （副査） 教　授　根岸　一美　　講　師　本間　直樹

論文内容の要旨

本論文は、現代日本が誇る作曲家群の一人武満徹（1930－1996）とその同時代者たちに焦点をあて、いわゆる「現代音楽」の領域で暗示されていた「作曲」「作曲家」概念を拡大しつつある傾向に着目して、緻密な資料検証と論理的推論により明示することをねらった研究である。すなわち、作曲とは音楽作品を創作すること、そして作曲家とはその行為に従事する人、というのが西洋近代およびその影響下にある日本を含めた諸地域での通念であったのだが、20 世紀後半という時代は多くの既成概念を打破して斬新なかたちに変容させる現象がさまざまな文化領域で見られるようになった。「作曲家武満」の場合も、実際に彼が従事した活動を丹念に吟味してゆくと、従来の「作曲家」概念をはるかに超越した「企画者」という特性が年毎に濃厚に顕在化してゆくので、それを論証するのが本論文の目的である。

論文の構成は、序章と結章に挟まれた主要部分の２章がそれぞれ４節ずつから成るかたちをとる。まず、序章「課題と方法」において、単に作曲家と称して武満を考えると彼の本質が見えてこないことを指摘したうえで、新たに「企画者」として捉えることが適切であると主張し、この語を「作品や公演によって人を触発する人間」そして「相手からのフィードバックを引き出すような作品や公演をつくり出す人間」を意味する、と概念規定する。さらに、企画者としての武満が社会的に確立してゆく過程で浮かびあがってくる具体的な事柄として、「共同制作」「人選」「人脈」ということに彼が注意力をはたらかせていたことを指摘する。また、以下の本論で検討するための作品群としては、すでに確立した企画者として活躍していた時期のものではなく、むしろその資質が成立してゆく過程を捉えることができる三つの作品に限定することを述べる。

第１章「『実験工房』と松尾バレエ団の共同発表会　バレエ実験劇場－企画力の形成」でバレエ実験劇場公演に焦点をあてるのは、これが武満の志向する共同制作と共通性を有している一方で、異なる部分もあるからである。すなわち、個々の芸術家がつくり出したものは斬新で充実したものであったにもかかわらず、バレエ実験劇場が第１回公演のみに終った要因を分析することで、公演の企画成功のためには、芸術家同士の触発的な連携、さらに観客の志向性を把握すること、そして、経済支援が重要であることが彼によって認識されたに違いないと推定する。

第２章「武満徹による共同制作の企画－企画力の展開」においては、第１章で明らかになった企画成功のための要件について、武満の企画による共同制作の成功例を通して具体的に検討する。また、武満が演奏家に求めたのは、武満の指示を一旦は咀嚼したうえで、個々の演奏家による音色追求の工夫が聴き手や武満自身を触発するような演奏で

あること、さらに、芸術支援が触発的な事業展開のための契機となり得ることを、メセナ活動に関心をもつ企業に対して提言したことを指摘する。

結章「企画成功の核心－触発性」では、すでに検討した共同制作の事例から見えてくる企画の成功を、普遍的成功と世俗的成功という二つの側面から再構成する。普遍的成功とは、提示するものが歴史的な位置づけを得ることであるのに対して、世俗的成功とは相手を触発するものを提示し、相手からのフィードバックを次の企画に活かすことによって得られるものであるとする。そして、本論文が世俗的成功の側面をとりあげて「企画者」としての武満を論じた、と結ぶ。

（分量　本文 78 頁 400 字詰原稿用紙換算約 280 枚　付録　写真、参考文献、要旨等 46 頁　CD 1 枚）

論文審査の結果の要旨

現代音楽とはいえ、すでに過去のものとなってしまったものや人物を主題として選択した場合、論者にとって有利な点と、逆に不利な点がある。都合がよいのはたとえば、資料が豊富に存在していること、そして現場を体験した人たちが数多く生存していることである。不都合なのは、豊富な資料が散在しているために収集に苦労するし、目撃者たちの反論を買うような分析ともなりかねないことが挙げられる。この論文の著者は、そうした状況をよく理解したうえで、注意深く、かつ大胆に、資料収集とインタヴューをおこない、対象としての武満徹の知られざる側面を抽出することにより、すでに一般に形成されている作曲家像を補強する一方で、是正すべき側面を前面に打ち出している点で高く評価できる。また、入手しにくい生の資料を取得したうえで、原所有者の許可を得て論旨を補強すべく、付録資料として写真や CD を組み込んだことも、公刊されつつある全集などを補うものとして資料的価値が高い。

ただし、本論文で最も重要な鍵言葉である「企画者」という用語とその概念規定が最適であったかどうか、という点でやや疑問の余地がある。また、主たる分析対象の選択に関して正当な理由づけがなされており、論旨を明快に展開するうえで賢明な措置であったとはいえ、「企画者」として確立していた時期の作品や公演についての論議がもっとなされてこそ、より説得力のある論考になったと思われる点で惜しまれる。しかし、この短所は本論文に続く研究により徐々に補ってゆくことが可能であり、学界に対する貢献度の高い本研究の価値を損なうものではない。よって、本論文を博士（文学）の学位を授与するのに充分な価値を有するものと認定する。